第１回　長野市活力ある学校づくり検討委員会　議事録（要旨）

【開催日時】

日　時　　平成 28 年 7 月 29 日（金）午前 10 時～正午

場　所　　長野市役所　第一庁舎　５階庁議室

【出席者】

（委　員）

山沢委員長、井ノ浦委員、風間委員、小林委員、志川委員、髙橋委員、田川委員、西脇委員、藤澤委員、松岡委員、丸山委員

（長野市）

近藤教育長、松本教育次長、熊谷教育次長、上石学校教育課長、倉島主幹兼小中高連携推進室長、塚田主任指導主事、新村係長、原主事、菊池主事、中村指導主事、増田指導主事、千野指導主事、島田指導主事、山岸指導主事、田中指導主事、深澤指導主事、藤森指導主事

【会議次第】

１　開会

２　あいさつ（教育長）

３　自己紹介

４　委員長選出

５　諮問

６　協議

⑴長野市の学校の現状と経緯

・市立小・中学校の現状と経緯

・長野市の学校教育を取り巻く現状

⑵今後の検討委員会の進め方について

７　次回開催予定

８　閉会

【会議資料】

資料１　市立小・中学校の現状と経緯

資料２　長野市の学校教育を取り巻く現状

【発言要旨】

資料１、資料２（17 ページまで）　事務局より説明

（委員長）

○　長野市の場合、小規模の学校とはどのくらいの規模のことをいうのか。

（事務局）
○　長野市の場合、小規模校は基本的に単級、つまり、１学年１学級以下をいう。

（委員）
○　教員はどのように配置されているのか、非常勤教員も合わせて示してほしい。

（事務局）
○　学級数に応じて、配置される教員数の基準が決まっているので、次回、各学校の教員配置数の一覧を非常勤教員も合わせて提示したい。

（委員長）
○　１学級何人いると良い授業ができるのかということは、学術的にも明快な回答はないとのこと。しかしながら、今後、専門家の考えを聞くことも可能ではないか。

（委員）
○　自分が中学生の頃は８学級あったが、今は４学級になってしまった。部活動が限られたものしかなくなってしまった。小規模校だとやりたい部活ができないのがかわいそうだと思う。
○　子どもが少なくなり学級数が減ると PTA の役員を何回もやらなければいけなくなるので保護者の負担が大きくなる。
○　小規模校では、先生方が子どもと密になって細やかに見ていただけるので有難かった。先生方も余裕を持って仕事ができると思う。

（委員）
○　娘が通っている学校は逆に大きく、クラスにいろいろな子どもがいて先生が一人ひとりに向き合う時間が少なさそうに感じる。先生が数人の子どもにかかりきりになる場面もある。

資料２　18 から 20 ページ　事務局説明

（委員）
○　長野市の人口推計について 2060 年まで数字が出ていたが、人口減少はまだまだ続き、ある自治体では 2100 年を超えてようやく人口が横ばいになるという推計も出ている。この先、数十年人口が減少し、児童生徒数も減少する中で、学級数や児童生徒数に軸足を置いて学校の適正規模の基準を決めると、どこまでいってもイタチごっこのようになってしまう。学校の適正規模をどのように考えていくのか、小規模ではいけないのかということを併せて議論していかなければいけないと思う。

（委員）
○　資料１の３ページ、市立小・中学校の概要の学級数は、複式学級を解消した数字であるか。

（事務局）
○　資料１の３ページの学級数は、複式学級を解消した学級数となっている。

（委員）
○　小学校、中学校が中心となって地域が発展している。これは市街地でも中山間地でも同じだと思う。

（委員長）
○　学校の学区は地域の自治組織の一番小さな区割りになっていた性格があると思う。歴史を見ると、長野村、箱清水村など村であった。元に立ち返って今後を考えないと解決しないと思う。それらをまとめた形で、長野市は方向性を示さないと、必ずひずみが出てくる。

（委員）
○　地域コミュニティの核というとき、地域をどの範囲と考えるかということがある。鍋屋田小学校は行政区、小学校区・中学校区、それから住民自治協議会、区という行政連絡区の単位などが多岐にわたっている。学区を考えるための基礎データとして、それぞれの小学校・中学校がどのような行政区に属しているかという資料を次回いただきたい。

（委員）
○　市として活力ある学校とはどう考えているのか。また、個人、たとえば委員長個人としてはどう考えるのか聞かせていただきたい。

（事務局）
○　市としては、活力ある学校はこの委員会の皆様のご意見をお聞きして構築するものと考えている。
○　私個人の考え方として、連携が大切になってきていると思う。子ども同士の連携、子どもと教師の連携、コミュニティスクールとして地域との連携、いずれにしろ、私とあなた、私とあなた達、また、私達とあなた達、そういう連携、関係性があっての豊かな学びが、ある意味では活力に少し重なってくるのではないかと思う。

（委員長）
○　私の考えは次回以降お話しさせていただく。

（委員）
○　自分はベビーブームの少し前の生まれだが、当時は１学級 45 人前後で、小学校で１学年８学級くらいあった。それを考えると、今の１学級の児童数の少なさは実感している。そうした中で、PTA の負担感も中山間地ではとても大きく、逆に大規模校は無責任ということではないが、PTA の役が回ってこなければいいな、という風潮もある。しかし、一番感じることは、やはりアンケートは実施すると思うが、例えば、小規模校に通っている子どもたちが、メリット・デメリットといったことを本当に

感じているのかということ。自分は大規模校だったので、10 人を切る学校もうらやましいと思ってしまう。今の子どもたちはどうなのかということが見えない。ここに書いてあることが本当に子どもたちにはどうなのかということを知りたい。

（委員）

○ 文部科学省による小規模校のデメリットに「体育の球技などでは制約が生じる」とあるが、小規模校の鬼無里中学校では、バドミントンで昨年度は全国大会に行き、今年は北信越の大会に出場する。文部科学省のデータだけを使うことは危険性がある。

（委員）

○ 本日出された資料の説明はそのとおりだと思う。私達住民とすれば、児童生徒がどんな人数でもよい教育をしたい。地域に根ざした学校をつくるということが、活力ある学校づくりには一番だと考えたい。学校と地域が問題を共有して、今ある学校をどうするのかということを住民の立場で考えていかなければならない。どちらかというと、住民自治協議会は、学校教育は別という意識があるように思う。しかしながら、住民自治協議会の組織の中には PTA もある。学校関係も含めての住民自治協議会だと捉えていこうと考えている。

○ 学校の子どもたちの状況は、保護者の生活環境の変化が大きく影響しているはず。この問題をどのように地域と結びつけていくか。むしろ地域からこの問題を考えていかなければいけないと思った。あくまでも私個人の意見である。

（委員）

○ 先ほど児童生徒の気持ちが大切だという話があったが、同時に教員がどのように考えているのかも大切だと思う。小規模校を卒業した高校生、あるいはもう少し上の成人、20 歳くらいの人が、社会に出たときに、どのようなメリット・デメリットがあったのかが分かると、社会に出る前にどうしたらよいのかが分かると思う。小規模校では、幼稚園から中学校まで関わる人がほとんど同じ人になる。そうした中で、社会においてどのように伸ばしてあげるかがすごく大事になってくる。また、社会人になったくらいの人たちがどう考えているのかが分かれば参考になる。

（委員）

○ 活力ある学校づくりということであるが、中山間地域では、子どもが元気だとその地域も元気がいい。学校だけでなく、地域の活力にもつながると思う。学校が地域に影響を与えることも含めて議論いただきたい。

以上